

口絵解説

1、「秋虫瓜蔬図」(跡見学園蔵)

掛幅一軸。絹本彩色。

縦百四十六cm×横八十七cm。

制作年、「明治十五年壬午秋九月中旬」

箱書、蓋表「秋虫瓜蔬之図 跡見瀧子筆」

蓋裏「大正丙申天長節 花蹊瀧題 時年七十有七

蹊 華

(朱文円印、陽刻)

莢箱表「秋虫瓜蔬之図 花蹊女史筆」

木口俛託蓋表「秋虫瓜蔬図／花蹊筆／大正五年／十月三十一日」

(いづれも花蹊自筆)

署名、「花蹊女史跡見瀧畫并題」

印記、跡見 (朱文方印、陰刻) 華蹊 (朱文方印、陽刻)

瀧印 書畫

遊印、桃李不言下 (朱文橢円印、陽刻)

自成蹊

出典等については、第二巻口絵解説 1、「四季花卉図」参照。

題文は以下の通り。

偶道遙園圃 糸瓜南瓜紫茄鬼灯玉蜀黍之属 吐花著子狼藉

横風露 胡蝶寒蝉螽斯絡緯蜻蛉蝸牛螳螂之属 飛躍蚊

行遊其間各有姿致秋色可掬 因欣然写其真図成貼之壁 焚

香静坐以觀造化之妙焉 適客至覽觀久之曰 君何從得好粉

本而摹写之明乎清乎将 我邦元禄間良工乎何其写生之妙 殆

奪天工 余笑而揭簾指秋圃狼藉之景色曰吾粉本在于此于時

明治十五年壬午秋九月中旬也

花蹊女史跡見瀧画并題

偶道遙園圃、糸瓜 南瓜 紫茄 鬼灯 玉蜀黍之属吐花著子、狼藉

横風露。胡蝶 寒蝉 螽斯 絡緯 蜻蛉 蝸牛 螳螂之属、飛躍 蚊行、

遊其間各有姿致、秋色可掬。因欣然写其真。図成貼之壁、

焚香靜坐、以觀造化之妙焉。適客至、覽觀久之曰、「君何從得」

好粉本而摹寫之。明乎、清乎、將我邦元祿間良工乎。何其写生之妙、

殆奪天工」。余、笑而揭簾、指秋圃狼藉之景色曰、「吾粉本在」

于此」。于時、明治十五年壬午秋九月中旬也。花蹊女史跡見

瀧画并題。

粉本に拠つて絵を描くのではなく、自然の景色にこそその手本があると記す。「掲簾」の表
現に自ら清少納言の才知に比する矜持の一面も感じられる。

なお、明治十五年第一回内国絵画共進会出品目録に、「(一) 野蔬類 南宗派 跡見花蹊」と
あるのは、本図のことと推定される(青木茂「日本近代の女流画家と跡見花蹊」)。

2、〔四愛図〕(跡見学園女子大学図書館蔵)

掛幅一軸。紙本墨画。

縦百十九・五cm×横四十二・三cm。

制作年、「乙亥榴月」(明治八年五月)

箱書、蓋表「四季之花寄書 跡見花蹊 吉井蔵」

署名、「花蹊画并題」

印記、跡見(朱文方印、陰刻) 西(朱文方印、陽刻)

瀧印 成

関防印、自我(朱文方印、陰刻)

遊印、鳳有(朱文方印、陽刻)

作古 高梧鶴有(香道人刻)
有松(花蹊印譜による)

「自我作古」(「自我作古」)

「先例にこだわらず、自分自身が新しい例を作る」の意

出典

(永淳元年) 戊午、立皇孫重照為皇太孫。上欲令開府置官属、問吏部郎中王方慶、对
曰、「晋及齐皆嘗立太孫、其太子官属即为太孫官属、未聞太子在東宮而更立太孫者也」。

上曰、「自我作古、可乎」。

(『資治通鑑』卷第二百三、唐紀十九、高宗天皇大聖大弘孝皇帝下)

「鳳有高梧鶴有松」（「鳳有高梧鶴有松」）

出典 元稹「鄂州寓館巖澗宅」（「元氏長慶集」卷十九）

題文は以下の通り。

余画四愛 必先焚香

端坐 以洗心塵 而後操筆

澹々掃去 則風枝露葉

自覺精神也 若以躁氣

作之 則欠精神矣 箇中消息

深乎画法者 自知之

乙亥榴月 花蹊画并題

余、画^{クニ}四愛、必先^ズ焚^キ香、端坐^{シテ}以^テ洗^フ心塵^ヲ。而^{シテ}後、操^リ筆澹々^{トシテ}掃^ヒ去^{ラバ}、則^チ

風枝露葉 自^ラ覺^ス精神^ヲ也。若^シ以^テ躁氣^ヲ作^{サバ}之^ヲ、則^チ欠^{ケリ}精神^ヲ矣。箇中^ノ消息^ハ、深^キ乎

画法^ニ者 自^ラ知^{レリ}之^ヲ。乙亥榴月、花蹊画^シ并^ビ題^ス。

「四愛図」（菊、蓮、梅、蘭の四種を描くもの。陶淵明が菊、周茂叔が蓮、林逋が梅、黄魯直が蘭をそれぞれ愛した故事による）を描くには、香を焚き心を静めて描くと述べる。平成十四年一月購入。旧蔵者「吉井」は、花蹊の叔母梅子の嫁ぎ先「吉井見竜」の可能性が考えられる。

3、「誠之為貴 扁額」（跡見学園蔵）

扁額一面。紙本墨書。

縦三十九・五 cm × 横百二十二・七 cm。

制作年、「明治辛巳春日」（明治十四年）
署名、「花蹊跡見氏」

印記、跡見（墨文方印、陰刻）

瀧印

華蹊（墨文方印、陽刻）
女史書画

関防印、一研梨（墨文方印、陰刻）

華雨

「一研梨花雨」（「一研梨花 雨」）

出典・参考等

周晋「点絳脣 訪牟存叟南漪釣隱」（『絶妙好詞箋』卷三）

移舟去未成新句 一研梨花雨

『飛鴻堂印譜』四集卷二

一研梨花雨

書は以下の通り。

誠之為貴

誠^{ニスルヲ}之^ス為^{シト}貴

『中庸』中の君子の徳目を論じた部分よりの四字句。中猿楽町時代の塾の各部屋に掲げられていた扁額の一と思われる。

出典

『中庸』章句、第二十五章。

誠者自成也。而道自道也。誠者物之終始。不誠無物。是故、君子誠之爲貴。

4、「跡見花蹊写真」（跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵）

アルビュメン・プリント。厚紙台紙へ貼附。台紙裏面は桃色に赤で印刷。

縦十四・六cm×横十・二cm（写真面）

撮影年、明治中期

撮影者、「東京一番町 武林誠一」